

# 仮名本『曾我物語』の方法

——母の造型と行動論理をめぐる——

## はじめに

『曾我物語』の諸本は、大きく真名本と仮名本に分類される<sup>①</sup>。そのうち、仮名本は、作品の伝播を考えるにあたっては特に注目すべきテキスト群である。このことと関わる仮名本の特徴は、以下の三点で整理することができる。

まず、諸本の数である。仮名本は、真名本と比較してみても遙かに多くの諸本が存在し、古活字本・整版本の段階に到るまで、多くの異本を生み出しつつ読み継がれてきた<sup>②</sup>。次に、故事・成句の引用のありかたに代表される表現の質である。古注釈書や唱導資料を始めとした多数の文献からの引用が確認されており、近年ではお伽草子や連歌など、室町の文芸との繋がりも示されつつある<sup>③</sup>。そして三つめは、多くの「曾我物」との関連である。『曾我物語』は、とくに仮名本が能・幸若舞・浄瑠璃・歌舞伎など実に様々な芸能の素材となることでも、長きに渡って受容されてきた<sup>④</sup>。こうした豊かな伝播の様相は、見方を変えれば、仮名本はその

内にこれほどの伝播を生み出していくだけの力を持ち合わせていたということである。しかしながら、仮名本の作品構造や人物造型といった作品内部の詳細については、まださほど目が向けられていない<sup>⑤</sup>。従来、仮名本の物語世界については、

全体として仮名本は、その場の趣向に工夫を凝らす、それを優先するあまり、物語全体に目が行き届いていないという印象が強い。しっかりと均整のとれた物語世界の構築という点では、真名本に劣ると言わざるをえないし、それは仮名本の後出性をも指し示している<sup>⑥</sup>。

という位置づけに代表されるように、決してその評価は芳しいものではない。こうした状況もあって、仮名本の描き出した物語世界を読み解く試みは、なお取り組むべき余地が残されているように思われる。

仮名本は、真名本とは異なる主題を持ち、その本文系統は複雑である。仮名本の物語世界を明らかにするためには、諸本の本文比較だけではなく、それを踏まえて、仮名本単一の問題としての分析を深めていく必要がある。こうして、仮名本の特徴を明らか

にしていくことで、伝播の様相を根源から捉え直していくことが期待できるのではないだろうか。

こうした問題意識のもとで仮名本と向き合うにあたって、本稿ではまず、曾我兄弟の母の人物形象のありかたを検討することとしたい。

『曾我物語』における兄弟の母をめぐる分析は、これまでは主に真名本を対象としておこなわれてきており、仮名本に関しては、後述する村上學氏の研究を除くと、ほとんど取り組まれていない<sup>⑧</sup>。しかし、村上氏が指摘するように、兄弟の母の描かれ方は、真名本・仮名本諸本のあいだで同様の枠組みにありながらも、実は大きく異なる人物造型がなされており、とくに仮名本については、諸本間における表現の揺らぎを視野に入れた作品分析を試みる余地が残されている。そこで本稿では、以下、仮名本に描かれた個々の場面における兄弟の母の造型をていねいに把握し直すことで、仮名本の特質を捉え直す可能性の一端を示してみたい。

さて、村上氏は、仮名本の登場人物が、「(ひとりひとりの・筆者注)基本的な性格や(他著との・筆者注)関係が周囲の状況の変化に応じて変質すること」のない「単一固定的な性格を有する」ものとして、揺らぐことのない性格規定のもとに造型されており、その点が真名本にみえる人物造型の方法とは決定的に異なっていることを指摘している<sup>⑩</sup>。そして、そうした指摘の一環として、兄弟の母の描かれかたについて、「河津助通の未亡人として、伊東の本領の回復と遺児の将来について思案をめぐらし措置をなすべき者に設定されている」と述べている。そこで、本稿ではまず、村上氏のいう人物造型の「固定性」「単一固定的な性格」づけという指摘を、

あらためて仮名本の本文に即して確認する形で、母の描かれ方を追っていくこととする。そして、その「固定性」がどこまで意識的に作り込まれたものなのか、人物造型に対する表現意識の深度を測りつつ考察していきたい<sup>⑪</sup>。

なお、本稿では十行古活字本を分析対象とする。また、兄弟の母については、煩雑さを避けるため、これ以降は単に「母」と記すこととする。

## 一 母の嘆き

夫が討たれた。ここから母の物語は始まる。夫を失った悲しみは大きく、母は「思ひのあまりに」、幼い子供たちに敵討ちを命じる(巻第一「河津がうたれし事」)。しかし、母の悲しみはこれだけでは癒えることはなかった。このとき、母は懐妊中であったが、舅伊東祐親が生き続けて後世を弔うように言ってきたのに対して、以下のように反応している。

(1)「夫のわかれば、昔も今も、おもき所なり。わかれの涙、袂にとままりて、かわく間もなし。後先をもしらぬ、おさなき物共にうちそへて、身さへたゞならず。様をかゑんと思へ共、尼の身にて産所の体も、見ぐるし。又、淵川へしづまんと思ふにも、この身にて死しては、罪ふかゝるべしときけば、ともかくにも、女の身ほど、心うきものはなし」とくどきたてて、おきふしに、なくよりほかの事ぞなき。

(巻第一「河津がうたれし事」)  
母はこのとき、幼い兄弟と身籠っている子のことを、出家するこ

とも、死ぬことも許さない足枷のような存在と考え、この状況を嘆いている。(傍線部)。そして四十九日の供養を終えた次の日、母は無事に男子を出産する。しかし、さっそく母は、「なんぢが父の孝養にせんとおもへば、身にはそへざるぞ。ゆめ／＼うらむべからず」(巻第一「御房がむまる、事」と、出家への一歩として、生まれたばかりの子供を捨ててしまう。その決心は固く、夫の弟伊東九郎祐清の妻が止めに入るも聞き入れず、生まれた子は祐清の妻に譲り渡すこととなった。こうして母は、夫の百箇日法要に当たる日に「かならず尼になりぬべし」(巻第一「女房、曾我多うつる事」と、袈裟衣を用意し出家の準備を整える。このとき母は、幼い子供たちの母親としてではなく、河津三郎の未亡人として生きる道を迷わず選ぶのである。

しかし、その道は舅伊東祐親によって阻まれる。祐親は、「いかなる有様にても、身をやつさずして、をさなき物共を(育み給へ)」(巻第一「女房、曾我多うつる事」と、母親として子供を育てることを求めた。そして、自らとゆかりある曾我太郎祐信との再婚話を持ち出し、「やがて、人をつけ、きびしくまぼりければ、尼になるべき隙もなし」(同前)と、母に選択の余地を与えなかったのである。母は、この再婚により、河津の未亡人として生きる道だけでなく、河津の者であるという立場すら失うこととなった。「河津」から「曾我」の女になるという不本意な道を強要された母の恨みは、次の通り深いものであった。

(2)うらみながらも、月日をぞをくりける。これをもつて、昔を思ふに、せいぢよは、夫のために、禁獄にとめられ、はくゑいは、夫におくれ、夷のすみかになれしも、心ならざるうら

めしき、今さら、おもひしられたり。

(巻第一「女房、曾我多うつる事」)

この時点では、母は、兄弟の母親というよりも、河津の未亡人という意識を強くもっていると考えられることに注意しておきたい。そして、その意識は、曾我の女房という立場になったのちも変化することはない。次節以降では、その様相を確認していこう。

## 二 生き続ける意味

再婚の後も、母は曾我の女房としての日々々に納得することはなかった。しかし、その一方で、不本意ながらも生きる意味を見出していた。その内実は、兄弟が頼朝の元へ連行されるという出来事によって明らかとなる。この出来事は、兄弟の敵である工藤祐経が、頼朝にとつて「末の御敵となるべき者」(巻第三「源太、兄弟めしの御つかひにゆきし事」として兄弟の存在を告げたことにはじまる。頼朝は、梶原源太景季に、急いで兄弟を連れてくるよう命じる。この事態を知った母は、以下のように嘆き悲しむ。

(3)「こ、ろうや、これは何となりゆく世の中ぞや、夢とも現ともおほえず。げに夢ならば、さむる現もありなまし。」<sup>①</sup>うき

身の上のかなしきも、かれら二人をもちてこそ、よるづうさもなぐさみつれ。<sup>②</sup>身のおとろふるをばしらで、いつか成人して、おとなしくもなりなんと、月日のごとくたのもしく、後の世かけておもひしに、きられまいらせて、その後、うき身は何とながらへん。たゞもろともに具足して、とにもかくにもなしたまへ」となきかなしむ、その声は、門のほとりま

できこへける。(巻第三「母なげきし事」)

この嘆きの中で、母は、幼い兄弟がいることで曾我の女房としての「うき身の上」の「うき」を慰め(傍線部①)、兄弟の将来を思うことで生き長らえていたことを明かす(傍線部②)。この母の思いは、これに続く、兄弟が連行された後の場面であり具体的になる。

(4) 仏にむかいてくどきけるは、「げにや、かれらが父のうたれし時、いかなる淵瀬にも入なんと、思ひこがれしに、かれらを世にたてんとおもひて、つれなく命ながらへ、あかぬすまひのこ、ろうかりつるも、ひとへに子どものためぞかし。きられまいらせての後、一日片時の程も、身は誰がためにおしかるべき。ねがはくは、われらが命もとり給ひて、かれら一所にむかへとりたまへ」と、声もおしまさずなきいたり。(同前)

母は、彼らを「世にたてん」、つまり立身させようと考えるところで、将来を思い描いた(傍線部③)。母は「ひとへに子どものためぞかし」というように、心憂き境遇を未来ある兄弟のために生きていた(傍線部④)。したがって、兄弟の命が奪われてしまったら、今後は誰のために生きていけばいいのかと嘆いたのであった(波線部)。母のこうした思いの強さは、「きられまいらせて、その後、うき身は何とながらへん。」「わが身は何となるべき」(いづれも巻第三「母なげきし事」と、こののちも繰り返し語られることから窺える。したがって、母は、兄弟が連行された後は死を願うまでに悲しんだのであった(傍線部④)。

河津の者としての立場を失った母であったが、母の元には夫の

形見ともいえる幼い兄弟がいた。母は、この子供の将来に期待することで、曾我の女房としての不本意な日々を生きるようになっていたのである。

### 三 希望の内実——河津の未亡人として

兄弟を「世にたてん」と願っていた母は、兄弟が成長を遂げたことでその実現へと動き出す。母は、それぞれに希望を託し、二人を異なる道へと歩ませることにした。まず、兄の一万は十三歳のときに元服し、「曾我十郎祐成」と名乗ることとなった(巻第四「十郎元服の事」)。一方、十一歳の箱王には、箱根山に行くよう言い聞かせた。箱王を法師にし、ゆくゆくは親の孝養をさせようと考えたのである(巻第四「箱王、箱根へのぼる事」)。兄一万は曾我を名乗る武士に、弟箱王は法師に。これが母の思い描く、望ましく成長した兄弟の姿であった。

しかし、こののち母は思いもよらない形で、十七歳になった箱王と再会することとなった。箱王は、兄同様に元服し、曾我五郎時致として母の前に現れたのである。箱根山にて自分に本当の父がないことを痛感した箱王は、敵への憎しみを募らせた。こうした折に、敵である工藤祐経に出会うという出来事を経て、敵討ちの決意を固め、元服に至ったのであった。五郎の思いを知る由もない母は、怒りを露わにして五郎を勘当する。勘当を告げる際、母はそれぞれに託した希望、それが叶わなかった悔しさを以下のように語る。

(5) 「これは夢かや、現かや、こ、ろうや、今より後、子とも母

共思ふべからず。かりそめにも見えず、音にもきかざらん方へまどひゆけ。何のいさましさに、男にはなりたるぞや。十郎が有様を、うらやましくおもふか。①一匹もちたる馬をだにも、けならかにかはづ、一人具したる下人にだにも、四季折節に扶持をもせず、あけくれ見ぐるしげにて、目もあてられず。世にある人々の子どもを見る時は、誰かはおとるべきとおもふにも、涙の隙はなきぞとよ。おもひしらずして、物にくるふか、うらめしや。法師になりぬれば、上臍も下臍も、乞食頭陀してもくるしからず。又、下臍なれども、知恵才覚あれば、法師にそしりなし。②十郎だにも、男になせし事のくやしくて、入道せよかしとおもふたる所に、くちおしの有様や。『善を見てはよろこび、悪を見てはおどろけ』とこそいゑ。③あはれ、河津殿ほど罪ふかき人はなし。後世とぶらふべき人々は、御敵とてほろびはてぬ。たまくもちたる子どもさへ、孝養すべき物一人もなし。④まことに末のたえなば、まのあたりの本領をよそにみんもかなしくて、もしやとおもふたのみに、兄は男になしたれども、親の跡をこそつがざらめ、名をさへかへて、曾我十郎なんどといわる、もくちおしし。一人の子は、父死して後、むまれしかば、すてんとせしを、叔父伊東九郎が養育せしが、それも平家へまいりたまひて後は、思ひかけざる武蔵守義信、とりて養育して、今は、越後国の国上といふ山寺にありときけども、父をもみず、母にもしたしまねば、思ひいだして、一返の念仏を申こともあらじ。それはたゞ他人のごとし。⑤かの子をこそ法師になして、父の孝養をもさせんと思ひしに、かやうになりゆ

く事のかなしさよ。しかも、わする、ことはなけれども、心ならず、しのびてこそすこせ、⑥今は誰にか、後の世をもとはるべき。……」(巻第四「母の勘当かうぶる事」)

まず、兄(十郎)を元服させたことについてみてみよう。傍線部③によれば、母はそこに、親の跡を継ぎ本領を回復するという希望を込めていたことがわかる。しかし、十郎は、親(河津)の跡さえ継ぐことができずに、継父の「曾我」の名を受け継いだ。このことをめぐる母の悔しさは、「曾我十郎なんどといわる、も、くちおしし」という言葉に如実に現れている。さらには、傍線部①にあるように、十郎の武士としての「有様」は、はなはだ見苦しいものであった。母は、こうした現実、十郎を元服させたことを悔い、今からでも入道してほしいとまで思っていたと述べている(傍線部②)

次に、弟(箱王)を法師にしようとしたことについてだが、母は弟には、「父の跡をも、わらわが後生をもたすけたまへ」(巻第四「箱王、箱根へのぼる事」と、両親の後世を弔うことをすでに命じている。そのことと関わって、本場面では、母が夫の孝養を念頭において箱根に登らせたことがあらためて語られている(波線部②)。しかし、箱王が元服したことで親の後世を弔う者はいなくなつてしまったのであった(波線部①③)。

このように、本場面では、兄弟揃って母の期待とはかけ離れた姿となつたことにより、母の希望が断ち切られたことが語られている。以上を踏まえて、あらためてここで留意しておきたいのは、母が兄弟に託していた希望とは、今では立場こそ曾我の女房となつたものの、紛れもなく河津の未亡人としての意識に基づくも

のであったということである。

#### 四 希望の変容

母の希望は失われたかのように見えた。しかし、母はその希望を変容させることで、ふたたび兄弟の将来を願うようになる。

ある時、兄弟が敵討ちを画策していると京の小次郎（兄弟の異母兄）から聞かされた母は、急いで兄十郎を呼び寄せ、敵討ちを制止する。

(6)「わ殿、無用の事くわたてつるものかな。恥は家の病にて、末代うせずと申ども、事にこそよれ。世にあらんとおもはば、恥をしのでびて、益をかうぶれとこそ申せ。げにや、河津殿のうたれし時、わらはおもひにたへかねて、いひし事をききもちたまふか。一旦はさこそ思ひしか……」

（巻第四「小二郎かたらひゑざる事」）

母は、十郎に「世にあ」ろうとするならば「恥」を耐えよと言いつけさせた（傍線部）。母の中では、かつて母自身が命じた敵討ちはすでに「無用の事」であり、「一旦」のこととして整理されていた（波線部）。この時点の母にとつては、「恥」を晴らす敵討ちよりも「世にある」ための「益」を受けることのほうが重要であった。

ここでいう「益」を受けることとは、頼朝から恩賞を受けることを指している。以下、その点を確認していこう。まずは、兄弟が敵討ちの前に母の元へ訪れる場面である。

(7)（十郎）「奉公をいたし、<sup>①</sup>御恩かうぶるべき身にては候はね

共、末代の物語に、富士野御狩の御供におもひ立て候。おそれ入たる申事にて候へ共、御小袖を一つかしたまは候へ」と申ければ、母き、て、「君臣をつかふに、礼をもつてし、臣君につかふるに、忠をもつてす」と、論語のうちにさぶらふぞや。何の忠によつてか、御感もあるべき。<sup>②</sup>御恩なくは、無益なり。あはれ、此度の御供は、おもひとまり給へかし。……」

（巻第七「千草の花見し事」）

十郎は、「富士野御狩の御供」として出かけることを理由に、母に小袖を乞う。「御恩かうぶるべき身にては候はね共」とあるように、謀叛人の孫という身で恩賞は期待していないことを母に伝えている（傍線部①）。これを聞いた母は、結果として小袖を渡すものの、「御恩」に預かることがなければ「無益」だとして、狩への参加自体を思い留まるよう言い聞かせている（傍線部②）。母にとつて、「御恩」に預かることは重要であった。

後に十郎は、この母の思いを汲み取って、五郎のために再び説得に臨む。それは、暫く後に、五郎の勘当が許された時のことである。十郎が、頼朝の富士野の御狩に供するつもりであることを伝え、母に小袖を乞う。母は十郎には小袖を与えるが、五郎の分は渡そうとしない。そこで、十郎は弟の勘当を許してほしいと願ひ出て、言葉を尽くして母を説得、ようやくのことで母が五郎を許すと、親子は久しぶりに三人で対面することとなる。そのとき、十郎は次のように言葉を続けるのである。

(8)十郎かしまつて、「<sup>③</sup>今度、御狩にまかり出、兄弟中に、いかなる高名をもつかまつり、おもはず御恩にもあづかり候はば、卒塔婆の一本をも心やすきさみ、父聖靈にそなへたて

まつらばやと存じ候」。母き、たまひて、「などやらん、此度の道心、心もとなくおぼゆるぞや。よき程にもさぶらはば、思ひとゞまり給へかし。さりながら、もしやののぞみもあはれなり。女房たち」との給へば、しろき唐綾に鶴の丸所くぬいたる小袖一つとりだし……」

(巻第七「勘当ゆるす事」)

このとき、十郎の本音は、無論敵討ちをすることであった。しかし、十郎は、それとは裏腹の説得を試みた(傍線部③)。頼朝の御恩に預かるという、母の抱く希望に寄り添ったのである。結果として、母は「思ひとゞまり給へかし」と言いながらも、十郎の求めに応じ、五郎に小袖を与えたのであった(傍線部④)。先の引用(7)に見たやりとりと比較すると、十郎の説得内容が、「御恩かうぶるべき身にては候はね共」(引用(7))から「おもはず御恩にもあづかり候はば」(引用(8))と変化している。母が、先よりも洩ることなく、説得に応じた理由に、「御恩」に預かる可能性をほのめかしたことが大きく関わっていることが読みとれる。このやりとりが、このあと兄弟を見送る際の母の言動にも通じていく。その様子は次のように描写されている。

(9)母は、乳母ひきつれ、広縁にたち出、見おくり、さまぐにぞいひける。「(中略)わが子と思ふ故にや、いづれもきよげなる者共かな。いかなる大將軍といふ共、はづかしからじ物を。あわれ、世にあらば、誰にかはおとるべき。おなじくは、かれらを父もろともに見るならば、いかにうれしくありなん」と、さめぐとなきけり。女房たち、これを見て、「物の御門出に、御涙いまはし」と申ければ、「誠に、かれら

貧なる出立、すゞろなる事ども思ひつらねられて、袖のみ昔にぬれ侍ふぞや。げにくく千秋万歳とさかふべき子共の門出、うれしくもいひだしたまふものかな。此度、御狩より帰るなば、上の御免かうぶり、本領ことぐく安堵して、おもひのま、なるかへるさをまつべき」とて、いそぎ内にぞ入にける。

(同前)

母は、「世にあ」るならば誰にも劣らぬであろう今日の兄弟の立派な姿を、亡き夫と共に見ることができればと涙する(傍線部⑤)。また、母の言葉の中略した部分では、「十郎は、父に似たれども……」、「五郎は……父には少しにたれども……」と、兄弟の姿から亡き夫河津三郎の姿を思い浮かべていることにも注目したい。母はいまだに河津の未亡人としての意識をはっきりと持ち続けているものとして描かれているのである。夫亡き今、その願いは決して叶うことはないが、兄弟の出発を「げにくく千秋万歳とさかふべき子共の門出」と述べ、傍線部⑥のように、兄弟が「上(頼朝)の御免」を蒙って本領安堵されること、すなわち「世にあ」る立場に至るといふ将来像にかすかな希望をつなぐのであった。

このように、母のこのときの希望は何よりも兄弟が頼朝の御恩に預かることであつたと考えられる。したがって、この場面をさかのぼって、母が兄弟との別れ際に、

(10)「かまへて、人といさかひし給ふな。世に有人は、貧なる者をは、おこがま敷思ひあなづるべし。さやうなりとも、とがむべからず。三浦・土肥の人々は、さやうにはあらじ。その人々にまじはり、ありき給へ。心のはやるまゝに、人のあひ

つけたる鹿、いたまふべからず。公方の御ゆるしもなきに、  
弓矢もたずとも、いでたまふべし。謀叛の者の末とて、とが  
めらるゝ事もやあらん。いかにも事すこしたまふな。年ご  
ろ、にくまれずして養ぜられたる曾我殿に、大事かけて、う  
らみうけ給ふな」  
(巻第七「勘当ゆるす事」)

と、争いごとを起こしてはならない、出過ぎてはいけない(以上、  
波線部)、目立たぬように、争わぬように、咎められぬように(以上、  
傍線部)と兄弟に重ねて言い聞かせた言葉も、「謀叛の者の  
末」という立場を憚つてのものであることはもちろんだが、その  
根底には、御恩に預かるという母の希望が作用していたことを読  
むべきではないだろうか。

## 五 母の希望がもたらした結果

兄弟が敵討ちを果たした。兄は討死、弟は首を斬られて命を落  
とした。母は、子供の将来に期待し、それを自らが生き続ける意  
味としていた。それゆえ、このとき母は全てを失ったも同然で、  
「かくても、我身、何にかはながらへはてん」(巻第十「曾我にて  
追善の事」と、嘆き悲しむ。また、嘆く中で「ことにかれら二  
人は、身をはなさで、左右の膝にすへそだて、父の形見と思へば、  
うき時も、かれらにこそはなぐさみしか。今より後は、誰を見、  
何に心のなぐさむべき」(巻第十一「虎が曾我へきたる事」と述  
べ、「父の形見」である兄弟だからこそ自分は慰められたことを  
明かしている。生きる意味を失った母に残されたのは、死という  
選択であった。

(11)母は、日の暮、夜あくるにしたがひて、いよ／＼思ひぞま  
さりける。「おしからざりしうき身なれども、かれらがゆく  
ゑ、もしやと思ふ故にこそ、つらき命もおしかりつれ。今は、  
土にて生まれあひ、今一度みんなとて、湯水をたち、ふしし  
づみければ、露命もあやうくぞ見えし。」  
(巻第十「曾我にて追善の事」)

母のとつた選択は周囲の制止によって未遂に終わったものの、  
死を選択するまでに絶望したことに変わりはなかった。

そんな母にとって皮肉なことに、母の希望は、兄弟の死によつ  
て少し形を変えて叶うことになる。五郎尋問の際、「曾我の別所  
二百余町を、かれら兄弟が追善のために、頼朝一期、母二期」と、  
自筆に御判を下され、五郎にいだけせ、母が方へぞ送れける」(巻  
第十一「五郎がきらるゝ事」と、頼朝が母に所領を与えたのであ  
る。それを受け取った母は、虎に対して、以下のように語る。

(12)「……き、給ひぬるや、是らが孝養せよとて、君よりは所領  
たまはり候。世には、敵うつ物おほく候なれども、心ざま  
にすぐるゝにより、かやうの御恩にあづかり候。いかにいふ  
かひなしとも、かれらが安穩ならんこそ、うれしくも」  
(巻第十一「虎が曾我へきたる事」)

御恩に預かり、所領を得る(傍線部)というのは母の希望で  
あった。注目すべきは、波線部である。直前「かやうの御恩にあ  
づかり候」からの文脈を踏まえると、この部分は、(兄弟の死に  
よつて)頼朝から恩賞に預かったが、(それよりも)かれらがど  
んなに取るに足らない者であったとしても、安穩にいる(すなわ  
ち、生きていく)ことこそがうれしく思われる、という意味とな



ろう。これは、恩賞よりも兄弟の命に重きを置いた発言である。これまで確認してきたような、恩賞に預かることを切望していた、河津の未亡人としての意識とは相容れないものである。兄弟、つまり子供の命を重んじているのは、母親としてのより根源的な意識のもとに発せられた姿勢と言えよう。ここには、兄弟の死によって始めて、母親としての自らの真情に気付くことになった母の変化が描かれているのである。

以上、村上氏の指摘を起点として、母が一貫して河津の未亡人であるという意識をもつ存在として造型され続けていることを仮名本（十行古活字本）の本文上で確認してきた。そして、その造型が一貫して固定化されていることで、物語終盤に見える兄弟を失った母の変化と、その母親としての言葉の他とは異なる質が鮮やかに際立つことになることを確認した。

## 六 母の行動論理

河津の未亡人として願ひ続けるという母の人物造型の基底には、仮名本が母に与えた行動論理を読み取ることができる。以下、その内実を確認していこう。

あらかじめいえば、仮名本では、母は周囲が求める姿を重視する人として一貫して描かれている。その指標は、今の自身の立場・状況に見合った行動ができていくか、周囲から求められているように振舞えているかどうか、ということになる。そして母は、その判断基準を自分の周囲の人々の目、いいかえれば「世の中」に置く人物として描かれていると考えられる。以下、その点を本文

に即して確認していこう。

作中で、母は最初からその論理のもとに行動する様子が描かれている。

(13) 河津が女房、これをきき、「弓矢とりのものいでの姿、女見おくる事、詮なし。内にいらせたまへ」といひければ、げにもとて、おのゝ内にぞ入にける。

（巻第一「佐殿、伊東の館にまします事」）

狩場に立出する夫を多くの妻女たちが見送りに出ていたが、武士の立出を女が見送ることは無益であると母が述べたことで、皆が見送りをやめたという場面である。女としてのあるべき姿に照らし合せて、ここでは、それに見合った行動をしなければと判断しているのである。

夫の死後、母は出家することを願うも、このとき母は身籠っていた。そうした我が身を、母は、引用(1)でみたように、「……様をかゑんと思へ共、尼の身にて産所の体も、見ぐるし。又、淵川へしづまんと思ふにも、この身にて死しては、罪ふか、るべしとさけば、とにもかくにも、女の身ほど、心うきものはなし」（巻第一「河津がうたれし事」と嘆く。

尼が妊婦というのは見苦しいこと、また妊つた身で死を選べば罪深いと聞いたこと、これらを理由に、母は身動きできずにいた。「見ぐるし」「さけば」とあるように、母が周囲の人々の意見を気にかけている様子が窺える。ここで留意すべきは、思うままに動くことができない原因を「女の身」であることに見出して嘆いていることである。同様の嘆きは、物語終盤の兄弟の死後、虎のものと尋ねる、以下の場面でも確認できる。

(14) や、有て、母いひけるは、「十郎がこと、わすれる事も候はねば、常にもまいり見奉たく候しかども、心にもまかせぬ女の身なれば、人の心をもはかるなどとせし程に」今までか、  
る御すまひをも見まいらせず候。……」

(巻第十二「虎いであひ、呼び入し事」)

母は、これまで虎のもとを尋ねられなかつたのは、思いどおりには動けない「女の身」であるために人(ここでは虎を指す)の心を憚っていたからだとしている(傍線部)。先の場面と同じく、母は思うままに行動できない理由として、自身が「女の身」であることを持ちだしているのである。

さらに、「貧なる者」としてのありさまに規制された母の姿は、兄弟が他界したのち、虎と対面する場面で、

(15) 「……見たてまつるべかりし物を、身の貧なるにより、したしむべきにもうとし、かたらふべきにも、さもあらで、よろづ思ふ様にも候はで、打すぎし事のくやしきよ。……」

(巻第十一「虎が曾我へきたる事」)

と、これまで「身の貧なる」がゆえに、虎と親しく語らえなかつたことを悔やんだり、それに続けて、

(16) 「……箱王は、法師にならざりしを、かりそめに「不孝」といひしそのま、  
「ゆるせ」といふ人もなし。身の貧なるに、何となくうちすぎ、月日をおくり、年ごろそわざりし、今さらくやくしく候ぞとよ。……」

(同前)

と、「身の貧なる」がゆえに、五郎の勘当を解けなかつたことを後悔したりする場面にも現れてくる。

さらに、これもすでに引用した記事に見える言葉であるが(第

三節引用(5)参照)、母は自らの判断で武士として生きることさせた十郎が、馬も下人も充分に扶持できぬ様子を見て、「あけくれ見ぐるしげにて、目もあてられず」と感じ、「十郎だにも、男になせし事のくやくして」と後悔の念を抱き、今からでも「入道せよかし」と考えていたことを明かしていた(巻第四「母の勘当かうぶる事」)。ここにも、あるべき姿に照らして判断を下し、それに苦しみ、見合わぬ状況を何とか正そうともかく母の姿勢が読みとれる。

以上のように、仮名本の母は、常に周囲が求める姿を考えてしまいがゆえに、その行動や判断を自ら制限せざるをえず、結果的にそれに圧迫されて苦しむ姿をもつて描かれている。したがって、いわば常に周囲の目と答え合わせをしている母は、時代の変化に敏感な者として造型される。作中で、母は、二度兄弟の敵討ちを制止するが、その理由としてどちらにも共通しているのは、今は「おそろしき世の中」だという認識であった。

(17) 「まことや、さしもおそろしき世の中に、悪事思ひたつとな。さやうの事、人々きかれなば、よかるべきか。上様の御耳にいらなば、めしとられ、禁獄、死罪にもをこなはれなん、おそろしきよ」とぞ制しける。

(巻第三「兄弟を母の制せし事」)

(18) 「まことか、殿ばらは、さばかりおそろしき世の中に、謀叛をおこさんとのたまふなるか。……」

(巻第四「小二郎かたらひゑざる事」)

(19) 「……この頃は、昔の世にもならず、平家の世には、伊豆・駿河にて、敵うちたる人も、武蔵・相模・安房・上総へもこえ

ぬれば、日数つもり、年へだたりぬれば、さてのみこそあれ。当代には、いさ、かも悪事をする者は、蝦夷が千島へいたりても、その科のがれず、又したしき者までも、その科のがれがたし。女とて、所にもおかれず。おさなければとて、たずかる事なし。かやうに、さしもきびしき世の中に、いかで悪事を思ひたたまふぞ……」

(同前)

これら三つの引用の傍線部で、母は「昔の世」とは異なる「この頃」「当代」のありさまを、「おそろしき世の中」、「きびしき世の中」と語っている。そうした世になったのは、「平家の世」から「当代」（すなわち頼朝の世）となったのちの話だとする。時代が変われば、母に対する周囲のまなざし（すなわち社会的な秩序や価値観）も変わる。時代の変化が、母の重視するあるべき姿に直結することになるのはいうまでもない。

以上のように、仮名本における母の行動論理は、周囲の人々の目、そして時代の流れと密接に繋がっていることがわかる。それゆえに、社会体制が変わっても、河津から曾我へと立場が変わっても、常に母自身を縛り続けるものとなる。ここにこそ、仮名本における母の人物造型の基調があると考えられるのである。

## おわりに

母の描かれかたを俯瞰してみると、夫の生前には、その行動論理にしたがって動く姿は認められるものの、それに縛られて嘆く様子は見受けられない。夫が亡くなり、河津の未亡人という立場をも失い、はじめて自身で判断し行動するようになったことで、

母は自らの行動論理との関係のなかで苦しみ、嘆くようになるのであった。そして母は、曾我に移り、「貧」なる立場となることで、その嘆きを大きくしていく。「女の身」「貧」といった条件は、常に社会から制約を受けるものとみなされているのである。

本稿では、まず、仮名本（十行古活字本）の母が、河津の未亡人という意識のもとにあり続けた人物として描かれていることを確認した。そして、その人物造型の基底には、周囲の目にあるべき姿として映るかどうかを判断基準とする、一貫した行動論理が読みとれることを指摘した。この点は、村上氏の指摘した、人物設定の固定化という仮名本の方法と深く関わる特質といえよう。なお、本稿では、母自身に関わる直接的な表現の様相を確認してきたわけだが、仮名本では、この行動論理は母以外の人々の造型にまで及んでいると考えられる。その実態については、次稿でいわれる「小袖曾我」の場面を分析することによって読み解いていきたい。

## 注

- (1) 村上學氏による、「曾我物語の本文は大別して真字本・大石寺本・仮名本の三種となるが、前二者は同系統のものであるから、結局は真字本と仮名本系の二種となる」という理解による。村上學「仮名本曾我物語略解題稿」（村上學・徳江元正・福田晃編『彰考館蔵曾我物語 下』〈三弥井書店、一九七八・四〉所収）。

- (2) 村上學氏の精緻な調査によって、多くの諸本が整理され、その過程で仮名本の本文系統の複雑さが明らかとなった。村上學『曾我物語の基礎的研究——本文研究を中心として——』（風間

書房、一九八四・二)。

- (3) 故事・成句に関わる研究については、主に、村上美登志「仮名本曾我物語攷——太山寺本のお故事引用をめぐって——」(『立命館文學』五一八、一九九〇・九)、渡瀬淳子「室町の知的基盤と言説形成——仮名本『曾我物語』とその周辺」(勉誠出版、二〇一六・六)などがある。

- (4) 特に幸若舞との密着度は夙に指摘されている。島津久基「幸若の曾我物語」(『国語と国文学』十一四、一九三三・四)や麻原美子「幸若舞曲小考——曾我物をめぐって——」(『文學』三五一十、一九六七・十)など。

- (5) 仮名本における人物造型については、たとえば小井土守敏氏によって真名本との比較から論じられている。小井土守敏「大磯の虎をめぐる十郎助成の描かれ方——『曾我物語』諸本間に見られる相違——」(『筑波大学平家部会論集』五、一九九五・十一)、同「『曾我物語』における源頼朝について——真名本と仮名本の相違・その主題——」(『文芸言語研究 文芸篇』三九、二〇〇一・三)など。

- (6) 梶原正昭・大津雄一・野中哲照校注・訳『曾我物語』(新編日本古典文学全集、小学館、二〇〇二・三)「解説」。

- (7) 真名本における兄弟の母について論じたものに、会田実「真名本曾我物語」の母親像——その悲しみの原質——」(『中世文学研究』十八、一九九二・八。のちに、同『曾我物語』その表象と再生」(笠間書院、二〇〇四・十一)に「母の悲しみとその原質」と改題されて収録、注(6)掲載書「古典への招待」などがある。

- (8) 仮名本の「母」を中心に論じたものとして、三木紀人「『曾我物語』の兄弟の母」(『國文學 解釈と教材の研究』九一一、一九六九・十)や、会田実「仮名本『曾我物語』論への視角

- (2) ——兄弟と母。抽象としての「都市」(『中世文学研究』二五、一九九八・八)などがある。また、芸能史研究の観点から、母が勘当を許す「小袖曾我」場面を中心に論じたものとして、佐藤和道「小袖曾我」考——曾我兄弟の舞と母親の始点——」(『観世』八六一三、二〇一九・三)などがある。

- (9) 村上學「真字本と仮名本のストーリー構造」(注(2)掲載書・付篇第二章)。

- (10) 注(9)村上論文。以下、本稿で言及する村上氏の発言はすべてこれに基づく。

- (11) 村上氏は、真名本を軸にすえた論述のなかで仮名本のこうした性格に言及している。その際、仮名本の関連本文はさほど具体的には提示されていない。

- (12) 引用は日本古典文学大系『曾我物語』(岩波書店)による。なお、表記は一部改めた箇所がある。

- (13) 引用に際して、括弧内に太山寺本の表現を補った。なお、この箇所には、彰考館本他の諸本にも同趣の表現がある。

- (14) 太山寺本では、「女の身」を嘆く表現(引用(13)(14))は、見られない。

(さいとう たか 本学大学院博士前期課程)